



Etsuko Kita

喜多 悦子さん

学校法人 日本赤十字学園
日本赤十字九州国際看護大学学長

豊かな経験を生かし、 学長として看護教育に 取り組む

看護の果たす役割を 広く深く見つめる

医師不足による影響が社会問題化しているが、それに優るとも劣らない問題が看護師不足である。国も看護職員確保対策を積極的に進めており、資質の向上、離職の防止や再就業の促進、養成力の確保などに力を入れている。

去る7月「保健師助産師看護師法及び看護師等の人材確保の促進に関する法律の一部を改正する法律等」が国会で可決・成立した（2010年4月施行）。看護師の基礎教育は4年制大学が基本となり、卒業臨床研修が制度化された。これにより看護師の質の確保や医療安全の推進、看護実践能力の向上などがさらに図られていくことになる。

喜多悦子さんは、日本赤十字九州国際看護大学の学長である。
「今、日本に182校ある看護大学で、単科で

「国際」と付いているのは唯一ここだけです」と喜多さんはいう。グローバルな視点で国際的に活躍してきただけに、誇らしさに実感が伴う。

同大学は、学校法人日本赤十字学園の6大学のひとつ。01年4月に開校、07年4月、大学院を設置した。08年度には修士第1期生10人が誕生している。キャンパスは福岡県宗像市郊外の豊かな自然の中にある。

「地球は今、看護を必要としています。国際的な努力にもかかわらず、温暖化や環境破壊が進み、自然災害、紛争、そして感染症による犠牲者が発生し続けています。日本では医療崩壊が、世界全体にも歴史的規模の経済クライシスが生じています。今、世界の何かが変わる時なのかもしれません。その中で看護、看護学はどんな役割を果たすべきなのか、常に広く深く考えていかなければならないと思っています。そして、それを21世紀の新しい学問、「人道科学」として発展させていく必要があります」。

こうした喜多さんの考え方は、「ひとりを見る眼、その目を世界へ」の同大学のキャッチフレーズに凝縮されている。

看護大学赴任以前には、医師として災害医療、避難民援助など、国境を越えて健康を守る活動を広く展開してきた。88年には、わが国初の紛争地支援として、パキスタン領内の300万を超えるアフガニスタン難民救済のために、2年間政府派遣された。また97年にはペルー大使公邸人質事件時の現地支援の功績によって、厚生・外務両大臣から感謝状を受けている。

喜多さんのこうした人道的活動は枚挙にいとまなく、02年エイボン女性大賞、08年医療功労賞を受賞。またニューズウィーク日本版の「世界が尊敬する日本人100人」に選ばれた。

最近の講演活動の一部を拾ってみると、「日本の経験をモロッコへー女性と子どもの健康のために」（09年8月JICA）、「アフリカの開発と女子教育ー就学率の向上を目指して」（08年5月東

京アフリカ会議関連シンポジウム）など、常に国際援助、健康、教育を見据えている。

こうした学長のもとで、同大では、学生の海外研修や交流、教員の国際活動の機会も豊富である。

看護師の力をもっと広く活用すべき

長い間人道的な国際協力活動を行ってきた喜多さんに、看護教育分野に入った理由を手始めに、考え方や実践ぶりをじっくりお聞きした。

「私は20年ほど国際活動に関わっている間、国内への関心はやや薄れていました。本学設立時に、現日本赤十字社近衛忠輝社長から「国際」を担当するよう要請があり赴任しました。教授4年を経た、管理運営する立場になりました。

日本にも医療崩壊、高齢化問題など、医療や健康に関する社会問題がたくさんあります。途上国で人々の健康のために日々闘っている人の多くは、特に医師の少ない地方で住民が病気のときに支援していたのは看護師でした。

日本では今、医師25万人、看護職は約6倍の150万人弱が働いています。しかし、今の医療崩壊問題の中で、看護職の役割があまり見えていません。もっと看護職が本来の活動で世の中に貢献できることがあるはずです。問題は仕組みです。現行の保健師助産師看護婦法（1950年施行）では、看護師が自立して働くことが難しいように思います。

看護師が地域で活躍
できるようになれば、
人々も安心して暮らせます

高齢者、弱者の健康を地域で支えること、例えばメタボリック症候群の予防に関して、保健師や栄養士の指導的役割が強化されつつありますし、必ずしも医師である必要はないと思います。学校での健康教育などを看護師が担える工夫も必要です。そして、医師は専門性の高い医療行為に専念できるようにすべきです。

保健師や助産師などの人材はまだまだ少なく、地域での健康維持、増進のための活動を担えるよう看護師が独立し、裁量権を持つて働く仕組みをもっと増やしてよいと思います。今はまだ、しほりが多いです。

医療には侵襲性を伴う行為が多くありますが、すべてを医師に任せるより、今後ますます高齢者が増えてくることを考えると、看護師による非侵襲的な医療行為の範囲がもっと増えてよいのではないかと思います。看護師が、地域で健康不安を持つ人へのスクリーニング的な関与ができれば、地域の人々ももっと安心して生活できると思います。

そのためには、教える人材の問題もあります。看護師は臨床技術だけでなく、もっとしっかりと基礎医学を学ぶ必要があると思います。

このように看護は今、もうひとつ発展する前の過渡期にあるような気がします。

レベルの高い看護のあるべき姿を語る弁舌もさわやかだ。さらに、喜多さんは、高齢化時代の医療、看護に関連してこう語る。

「国民が自分の健康や死をどう受け止めるかは、さらに重要な問題です。時が来れば亡くなるのは自然なことです。すべてを医療に押し付けるのは、少し違うのではないかと思います。

「最期の時」の在宅の役割は大きく、それは人間教育、社会教育になります。今の社会は家庭で死が見えない。とても不自然です」。

こうした看護教育の底辺には、常に国際協力がある。

「日本は、最近アフリカ支援を強化しています。が、東南アジアとの連携の重要性もきちんと認識しておく必要があります」。

喜多さんが9年前に福岡に来て感じたのは、東京から見る外国と、福岡から見る外国は違うということだ。福岡には、中国や韓国をよその国とは思っていないような空気が感じられるという。道標にも韓国語、中国語、英語がある。

「日本で小児科医、米国で医学研究を経て国際協力に取り組めたことがよかった。でなければ薄っぺらな国際協力屋になってしまったかもしれない。いろいろな国を見て、多くの人と出会いました。紛争地での「人の命」が軽く扱われることには、胸が痛みます」。

奈良県立医科大学卒業後、附属病院、国立大阪病院を経て国立国際医療センター。ユニセフ、WHO緊急人道援助へも出向。日赤国際部を経て、01年現大学教授。05年から現職。93年ジョンズホプキンス大学公衆衛生大学院上級研究員。

国際協力を強化するために、日本の看護職に公衆衛生学と豊かな専門性を持ってもらうべく教育に励む。暑い夏でも、学生たちを連れて途上国を回る情熱と健康の持ち主。今年はいンドへ渡った。

（北川巳代）